

大坂干鯛屋近江屋市兵衛の経営（四・完）

白川部 達夫

はじめに

近江屋田中市兵衛は、安政二年（一八五五）に家業の干鯛屋を再興し、明治初年には経営を順調に拡大した。明治一〇年（一八七七）には第四十二国立銀行の設立に尽力し、その頭取として大阪財界をリードする活躍を見せる。前稿では、明治期の近江屋市兵衛の肥料買付け状況を明らかにした。^①ここでは同期の肥料販売の状況について検討したい。

一 慶応三年～明治六年の販売状況

表1に慶応三年（一八六七）から明治六年（一八七三）までの近江屋の販売状況を示した。近江屋の販売総額は、慶応三年（一八六七）は銀二五〇万八千貫匁余、明治元年もほぼ同様で、明治二年（一八六九）には銀四一三万一千貫匁余と拡大した。明治三、五年は半期分の数値なので除くとして、明治六年（一八七三）には銀四七〇万九千貫匁余となり、最大規模となったことがわかる。

表1 明治初年の肥料の販売先 (単位：匁)

地域	区分	慶応3年	明治元年	明治2年	明治3年※	明治5年※	明治6年
大阪	地方(干鰯屋)	1,238,377	1,384,544	1,100,494	1,112,232	908,363	1,456,577
	市中	9,733	184,755	185,262		334,901	904,999
	小計	1,248,110	1,569,299	1,285,757	1,112,232	1,243,264	2,361,575
大阪周辺	摂津	188,129	346,649	648,991	152,253	125,100	167,819
	河内	2,884	6,908	66,227	13,441	12,162	18,384
	和泉	94,670	231,256	732,770	323,667	275,457	801,218
	不明	22,341	857		10,211	11,482	25,439
	小計	308,025	585,669	1,447,989	499,572	424,200	1,012,861
その他	紀伊	418,717	196,151	603,638	280,148	242,846	675,214
	東京	440,946		376,002	157,493	79,745	363,519
	その他	90,452	67,643	242,494	40,075	61,596	51,777
	小計	950,116	263,794	1,222,134	477,716	384,187	1,090,510
	不明	1,858	90,638	175,593	170,665	261,737	244,140
	合計	2,508,108	2,509,399	4,131,472	2,260,185	2,313,389	4,709,087
構成比率	大坂	49.8	62.5	31.1	49.2	53.7	50.1
	大坂周辺	12.3	23.3	35	22.1	18.3	21.5
	その他	37.9	10.5	29.6	21.1	16.6	23.2
	不明	0.1	3.6	4.3	7.6	11.3	5.2
	合計	100.1	99.9	100	100	99.9	100

出典：東洋大学井上門了記念博物館所管・近江屋市兵衛家文書44番、47番、51番、54番の「干鰯売日記」

※史料上の制約

明治3年、一般1月8日～6月7日、地方1月30日～8月

明治5年、一般1月8日～7月6日、地方1月6日～6月19日

その中心は、帳面では「地方」と称している永代浜(靱)の干鰯屋であった。前稿で検討したように近江屋市兵衛は、干鰯屋仲間からの仕入れは慶応三年(一八六七)については二九パーセントであったが、その後、一〇パーセントを切っている年が多く、松前問屋や荷受け問屋から仕入れたものが中心となっていた^②。したがってこの時期、近江屋市兵衛の取り引きは、松前問屋・荷受け問屋から仕入れて、これを干鰯屋仲間に売る問屋の営業が強まっていたことがうかがえる。和泉・紀州・東京への販売も直接消費者ではなく、当該地の肥料商・問屋が中心となっていた。もちろん販売規模が拡大しているので、摂津西成郡などの大阪隣接の農村を中心に、摂津・河内などの村々への販売も拡大傾向にあったといえる。

ところでこれまで近江屋市兵衛の買付けと売付け帳面がそろって存在することは、ほとんどなく、両者を対照することができなかつた。これにたいし慶応三年以降はほぼ対照が可能である。そこで慶応三年(一八六七)について見ると、買付け総額は銀六九万八千貫匁余、^③販売総額が銀二五〇万八千貫匁となり、販売総額が買付け総額の三・六倍と大ききなずれがあることがわかる。販売品目の数量で見ても、干鰯は買付けが七二四俵と二二貫目であったのたいし、販売は二四七五俵と七本で、ほぼ三倍となった。また鯉粕では、買付け重量四三八〇貫目にたいし、販売重量は二万八六四九貫八〇〇目で五倍強となっている。魚肥は前年後半期に入荷したものを次の年の春に売ることがあるので、その差が出た面もあるが、この数値はそれだけでは説明できない。これは買付け帳面が、近江屋が入手した肥料のすべてを網羅していないことを意味している。干鰯については、買付け帳面の記載分は、近江屋が自己資金で買付けたもので、それ以外に委託販売分がかなりあったらしいことを指摘しておいた。干鰯だけでなく、鯉粕以下にも委託販売分で買付け帳面に記録されていないものがあつたと考えられる。販売帳面には、委託販売分と明確にわかる記載は少ないので、全体像はわからないが、干鰯屋仲間への販売にはそうしたものが多かったのではなからうか。以下、これを前提に区分ご

とに買い手について特徴的なものを紹介する。

大阪では、地方の干鰯屋との取り引きが中心となっている。この頃の近江屋の帳面は、一般の部と地方が区別されている。地方は干鰯屋仲間との取り引きを記載しており、永代浜（靱）のことを地方と称したようである。⁴慶応三年（一八六七）では、販売総額の四九・四パーセントがこれにあたる。しかし特定の干鰯屋が目立って買付けているということはない。近江屋には明治七年「市うり」という帳面も残っており、市売りが行われていたことがわかる。市売りが行われていると、売り出す肥料は競りにかかることになるので、特定の干鰯屋との結びつきは生じない。⁵

大阪市中では、慶応三年（一八六七）～明治二年（一八六九）までは、あまり大きなものはなく、順慶町の魚屋藤吉が身欠き鱈や北海道産品を購入している程度である。これは食料品としての買付けと見られる。また近江屋が米を買付けたことにより、その米の販売も若干見られた。明治五、六年では大阪問屋島屋佐右衛門がかかわって、明治五年（一八七二）に関東赤大羽粕一九四六俵（重量一万六二九二貫目）、八戸赤中羽粕六〇俵（八九一貫八〇〇目）、同六年には宇和粕四一六九俵（重量七万八二七六貫六〇〇目）、佐伯粕一九一俵（重量三〇〇九貫六〇〇目）と大量の干鰯粕が売られていることが注目される。明治六年（一八七三）の場合、

五月廿三日

尾州内海

前野小平治殿

手船久吉丸積

問屋島屋佐右衛門殿

宇和カス

永寿丸仕入

貳百卅壹俵

⑤蔵入

貫メ四千七十式貫八百目

直し俵

同 九百七拾貳俵

⑥直し分

貫メ壹万六千九百廿四貫

千十式俵口

俵メ千貳百三俵^⑥

などと記載がある。この記載から内海船主前野小平治と大阪問屋島屋佐右衛門の関係が明確にはわからない。しかし宇和粕について「永寿丸仕入 ⑤蔵入」という記載があるので、注文について近江屋が⑤蔵に入っていた永寿丸から仕入れた分の宇和粕二三一俵を販売に宛てたことは明らかである。永寿丸は、明治五年（一八七二）干鯛買日記の一〇月一〇日に

永寿丸仁三郎殿

（宇和島問屋小堀喜之助）

問屋右同人殿

宇和粕五百六拾俵

貫メ壹万千貳百六十五貫^⑦

とあり、永寿丸がもたらした宇和島問屋小堀喜之助の宇和粕五六〇俵の一部だったことがわかる。したがって「手船久吉丸積」とあるのは、久吉丸が積んだ荷物を近江屋に持ち込んで、島屋に売ったとは解釈できず、久吉丸に積むことが近江屋に指示されていたと理解すべきであろう。そこで前野小平治と大阪問屋島屋佐右衛門との関係が問題となるが、

久吉丸は単に鳥屋の雇船として、宇和粕を指定された土地に運ぶことになっていたのか、鳥屋が近江屋から受け取って、前野小平治に売ることになったのかはつきりしない。しかしもし前野小平治が宇和粕を仕入れたいなら、鳥屋を通す必要もないので、やはり鳥屋が買付けの中心になっていたと考えざるをえない。そこでここでは、この取り引きは大坂問屋鳥屋のものと判断して処理した。

鳥屋は、地方の項目にはなく大阪問屋とされているので、松前問屋鳥屋源兵衛に繋がる人物と見られる。⁽⁸⁾ 鳥屋の場合、とくに指定のないこともあるが、内海前野小平治の手船徳吉丸、保吉丸、久吉丸などの指定が多かった。前野小平治は、尾張知多半島（内海）の有力な船主であった。⁽⁹⁾

摂津・河内では、大阪地続きの西成郡市岡新田、春日出新田、福崎新田などが、ほぼ連年買付けているが、ほかはあまり連続性はない。市岡新田では孫九郎がまとまった買付けをしているが、他は自家消費分程度の買付けであった。ほかにも明治三年（一八七〇）の西成郡野里村車屋久兵衛のように肥料小売商の買付けがあるが、ほとんどは農民が自家用に購入した程度のものであった。販売の多い村では同日に三、四名から一〇名前後まとめて帳面に記載されることが多い。適当にまとめて注文があったのか、まとめて村むらに送りつけたためと考えられる。ほかには尼崎の肥料商油屋長兵衛、梶屋久右衛門などとの取り引きが行われている。⁽¹⁰⁾ 河内では河内郡日下村が継続して買付けていた。

和泉については、大津・岸和田・岡田浦・高石・佐野湊・貝塚・箱作・尾崎など湊の肥料商からの買付けが基本であった。近江屋市兵衛店が再興されて間もない安政四年（一八五七）には大津・岸和田・貝塚の肥料商の買付けが全体の七七・二パーセントも占め、⁽¹¹⁾ その後、低下していたが、慶応・明治初年にはまた増加したことがわかる。

その他の地域では、紀州への販売が再開された。近江屋は天保期には、紀州との取り引きがあったが、再興された安政期には中絶したままだった。慶応・明治初年には、和歌山の岡屋清六（清右衛門）、久保村塩屋利八を中心に和歌山

の米屋六兵衛・打田屋安兵衛・才賀屋善八、中之島南方善兵衛、川上大谷村糶屋源治郎、里江名年屋由兵衛などが買付けを行っていた。この内、天保期に取り引きがあったのは和歌山の米屋六兵衛で、それ以外は、再興後に近江屋と取り引きを持つようになったものであった。

東京は、従来も取り引きのあつた喜多村富之助が中心で、慶応三年（一八六七）と明治五年（一八七二）は数子・身欠き鯉を、明治二年（一八六九）と明治三年（一八七〇）には赤糠・糠を販売している。また明治六年（一八七三）には赤糠七五〇俵を売っている。同年では東京深川の奥（和泉屋）三郎兵衛に宇和粕一三〇〇俵を売っており、宇和粕が東京にも送られたことがわかる。奥三郎兵衛も明治六年（一八七三）には糠の注文を近江屋に行ったようで、同年一月一二日付けの「買附覚」では糠五〇〇俵を買付けたという報告が近江屋側からなされている。しかし年末であつたためか、売日記の記録には載っていない。¹⁴

また他の国では、慶応三年（一八六七）に大和国葛上郡鎌田村孫右衛門に干鯛一三六俵を中心に鯉取、佐伯粕を売つたのを初めとして、明治三年（一八七〇）まで販売が行われた。大和では、明治二年（一八六九）にも鎌田村に隣接した葛下郡五位堂村金屋市右衛門に干粕一九二俵を売っている。ほかには明治二年（一八六九）に広島島の松本万兵衛に関東九七四俵を売っているのが大きなもので、数十俵単位のものだと播磨、山城などにも販売されている。また遠国では、三河拳母、吉田にも売られ、販路が拡大している様子がわかる。

つぎに表2に、慶応三年（一八六七）から明治六年（一八七三）までの、販売品目の代銀比重の変動を示した。最大のもののは鯉粕で、慶応三年（一八六七）から明治三年（一八七〇）まで、三〇パーセント前後を維持していたが、明治五、六年は一六〜一八パーセントとなり比重を下げた。干鯛は慶応三年（一八六七）より明治二年（一八六九）までは一五〜二二パーセントであつたが、以後は比重を下げた。メ粕は、明治五、六年に鯉粕に変わって高い比重を占めてい

表2 明治初年の販売品目の比重

品目	慶應3年	明治元年	明治2年	明治3年	明治5年	明治6年
干鰯	15.8	22.1	22.1	3.3	10.5	7.1
メ粕	16.3	8.1	9.9	8.7	30.4	52.3
鯡粕	30.5	48.1	31.7	31.6	16.5	18.4
羽鯡	1.3		5	24	5.8	1.5
数子・白子	14.6	2.1	4	9.7		0.8
種粕・玉粕	6.2	9.9	7.1		0.1	0.1
糠			5.6	6.9		2
その他	15.4	9.7	14.7	15.8	36.7	17.7
合計	100	100	100	100	100	99.9

出典・注：表1と同じ。

る。羽鯡は明治三年（一八七〇）に一七・二パーセントになったが、他では販売のない年もあり、まとまった販売はなかった。数子・白子も慶應三年（一八六七）に一四・六パーセントを記録しただけで、他の年は数パーセントであった。種粕・玉粕と糠は、幕末から明治初年に現れた販売で、近江屋が魚肥以外の取り引きに参入したことを示しているが、一時的なもので発展はしなかった。その他は、一定数を占めているが、大半は茅部粕、ルルモヘイなど産地名しか記載がなく、鯡粕か鰯メ粕かはつきりしないものである。全体に鯡粕が中心にはあるが、明治初年になっても絶対的に優位であった訳ではなく、明治五、六年のように、宇和粕が大量に入荷して、比重が下がるという局面もあった。

各品目について内容を見ると、干鰯は本場、鹿島、西方、日在など関東ものがほとんどで、北海道産干鰯がわずかしか見られないのが特徴であった。関東干鰯のほかは明治元年（一八六八）に加州引き（加賀）二九八三俵が売られていることが目立っているくらいである。買手は大半が地方の干鰯屋であり、それ以外では、和泉の港湾諸都市や紀州の肥料商、広島の本松兵衛、尼崎の油屋長兵衛などに販売している。また西成郡野里村車屋久兵衛に明治二年（一八六九）に干鰯五七三俵を売っている。

鰯メ粕は、関東物が明治五年以外はほとんどなく、南部中羽粕、地廻り鰯粕、佐伯粕、宇和粕、タルマイ鰯粕などが中心となった。タルマイ鰯粕のような北

海道産のものは天保期頃に比べると少なかった。¹⁵⁾ 明治五、六年に鯛ノ粕が全販売額の中心を占めるようになるが、これは宇和粕が大量に流入したためである。明治五年（一八七二）には宇和粕六四二五俵、明治六年（一八七三）には五〇二九俵が買付けられている。宇和島問屋小堀喜之助と加島屋商会からの買付けが主流であった。¹⁶⁾ これらは東京の奥三郎兵衛や大阪問屋島屋佐右衛門、干鯛屋以下、各地の肥料商に売られた。

鯛粕は、とくに特定のものに売ってはいないが、全体の内、慶応三年（一八六七）では重量二万〇五二一貫余、七一・六パーセントを地方の干鯛屋仲間に販売している。個別には、明治元年（一八六八）に大阪問屋島屋佐右衛門がタルマイ鯛粕三〇〇本（重量七四五七貫余）を買付けて前野小平治の手船保吉丸で運んだことが注目される程度で、干鯛屋仲間でも一〇〇本程度の買付けが多い方だった。この傾向は、羽鯛も同じであった。数子・白子は、あまり販売がなかったが、慶応三年（一八六七）に東京の喜多村富之助が鯛数子六五六本（一万二八五五貫余）を買付けている。

慶応三年、明治元年には玉粕が在村・地方で幅広く売られたが、和泉や紀州などには出ていない。種粕は、灘種粕が明治元年（一八六八）に干鯛屋の和泉屋惣兵衛に五〇〇玉を売っている。また明治二年（一八六九）には、干鯛屋仁和寺屋利助・古座屋又兵衛・稲葉屋十助・吹田屋弥兵衛に一五三〇玉と四七〇俵を売っている。この年はほかに天満種粕が売られていた。以後は、玉粕・種粕の販売はわずかしくなくなるが、明治二年（一八六九）に東京の喜多村富之助に赤糠二四〇〇俵、同三年は糠一〇〇〇俵、同六年にも赤糠七五〇俵を売っている。

その他は、明治元年（一八六八）には田作五九六俵が、明治二年（一八六九）には豊前・加賀・筑前・肥後などの米六四〇俵が販売された。また明治五年には南部粕一一五一俵と一五本（重量一万八七六九貫余）が売られた。南部は鯛の有力な漁場であるが、鯛も南下しており、どちらとも判断がつかないので、その他に入れている。さらに明治六年（一八七三）には、小女子粕一三三二俵と一〇本（重量一万四九〇九貫）が売られている。

二 明治九年～明治一〇年代の販売状況

明治九年（一八七六）から明治一八年（一八八五）の帳面については、前期や後期分の記載しかないものもあり、安定したデータがえられない。その内容は、表3の注記に示したが、結局、一年を通して記載のあるのは明治一七年度だけであった。

明治九年以降は、データが一年を通じて完全なものがないので、数値を比較することができない。そこで、ここでは各年度の目立った特徴を指摘するにとどめたい。

明治九年（一八七六）は、地方の干鰯屋仲間への販売記録しかないが、その販売総額は九一八一円余となった。明治六年（一八七三）の場合、販売総額は銀四七〇万九千貫余となり、明治初年の最高を記録している。このなかで地方の干鰯屋への売り上げも銀一四五万六千貫余となった。これを円換算すると一万四五六〇円余となる。明治六年（一八七三）から見ると明治九年（一八七六）の地方の売り上げ金額は三七パーセント減少しているといえる。なお明治九年（一八七六）の近江屋の買付け総額は八〇一九円なの¹⁷にたいし、明治九年では干鰯屋への販売だけで九一八一円と買付け総額を超えている。明治九年以降も、同様なので、やはり売日記には委託販売分が含まれたと考えられる。

明治一〇年（一八七七）では、摂津西成郡西島新田の錫屋新兵衛に鯡粕三九七俵（重量一万〇九〇貫）を販売していることが大きな取り引きであった。明治一一年（一八七八）では、紀州窪田村の宇田利八にマシケ・茅部鯡粕二〇〇俵（重量五四八六貫）他を売ったことが目立っている。また地方の取り引きでは西村久三郎へ米一〇八八俵という多量の販売を行った。地方の売付け額のほとんどはこれで占められ、この年地方の販売は西村のほか¹⁸に二名に羽鯡・能

登引き干鰯を売ただけだった。明治一二年（一八七九）では、地方で金沢和助に本場入梅引き干鰯五三〇俵（重量五三三二・四貫）、能登引き干鰯三六俵を販売したことが大きな取り引きであった。明治一三、四年は帳面に一般と地方の区別がなく、三、四月から一〇月までの記録となっている。明治一三年（一八八〇）では地方の取り引きはほとんどなく、一般の部が中心となった。明治一四年（一八八一）は地方が最大となり、摂津への販売がこれに続いた。明治一六年（一八八三）は、再び一般と地方が区別されるようになる。販売は地方と摂津西成郡が中心でほとんどを占めた。明治一三年（一八八〇）から同一六年（一八八三）までは、とくに個別にまとまった販売はなかった。

明治一七年（一八八四）は一年を通じてデータのある年である。地方の取り引きが中心で、近江屋千助に日在寒引干鰯以下の関東干鰯を七〇七俵（重量三五五〇貫余）と古関東干鰯四八七俵他、勝部吉兵衛に日在寒引き干鰯を九五七俵（重量八四三九貫）、佃木清治郎に羽鯉一九三二本（重量三一〇四貫余）などを販売したことが目立っている。他の地域では、広島海塚新八に本場新引き干鰯を三〇八俵を販売している。海塚には翌一八年にも関東の西方干鰯三九五俵（重量三四二九貫余）を販売している。また明治一六年（一八八三）から同一八年に伏見油掛町の綿本与助に鯉粕・関東干鰯などを販売していることも新たな動向であった。明治一八年（一八八五）では、和泉佐野の箕松新吉に本場寒引き干鰯を三九七俵を販売している。

全体に、摂津地域はある程度買付けがあったが、その他の河内の在村などの販売は振るわなかった。また紀州への販売が不安定になり、東京からの買付けはなくなったことが注目される。

表4に、この時期の販売品目の金額比重を示した。まず種粕・玉粕と糠については販売がなくなったことが確認できる。明治初年には、取り引きを試みたものの、継続したものにならなかったようである。糠については、近江屋から明治六年（一八七三）に東京の奥三郎兵衛の注文で五〇〇俵、また明治七年（一八七四）には東京の喜多村富之助に

明治13年	明治14年	明治16年	明治17年	明治18年
35	1,368	1,036	11,109	2,940
		1,240	10	
35	1,368	2,276	11,119	2,940
1,183	791	271	1,856	682
42	199		20	44
740	309	212	486	725
21	39		15	
1,986	1,338	483	2,377	1,451
789			785	
		224	1,369	761
789		224	2,155	761
564	277	7	593	289
3,373	2,983	2,989	16,244	5,441
1	45.8	76.1	68.5	54
58.9	44.9	16.2	14.6	26.7
23.4	0	7.5	13.3	14
16.7	9.3	0.2	3.7	5.3
100	100	100	100.1	100

鯛売日記」、大阪大学経済史経営史史料室所管・近江屋市兵衛家文書、明治

表3 明治10年代の肥料の販売先（単位：円）

地域	区分	明治9年	明治10年	明治11年	明治12年
大阪	地方（干鰯屋）	9,181	4,130	2,375	2,268
	市中				
	小計	9,181	4,130	2,375	2,268
大阪周辺	摂津		1,481	771	1,269
	河内		54	52	
	和泉		27	162	
	不明				
	小計		1,562	984	1,269
その他	紀伊		208	1,463	
	東京				
	その他		34	97	15
	小計		242	1,560	15
	不明			130	484
	合計	9,181	5,934	5,051	4,036
構成比率	大坂	100	69.6	47	56.2
	大坂周辺		26.3	19.5	31.4
	その他		4.1	30.9	0.4
	不明			2.6	12
	合計	100	100	100	100

出典：東洋大学井上円了記念博物館所管・近江屋市兵衛家文書61番、明治一〇年「干16年「売日記」

※記述の範囲

明治9年、一般なし、地方1月12日～12月9日

明治10年、一般7月19日～12月27日、地方2月3日～7月30日

明治11年、一般3月2日～8月9日、地方3月19日～8月

明治12年、一般2月4日～9月18日、地方1月31日～12月10日

明治13年、一般・地方区分なし、3月12日～10月15日

表4 明治10年代の販売品目の比重

品目	明治 9年	明治 10年	明治 11年	明治 12年	明治 13年	明治 14年	明治 16年	明治 17年	明治 18年
干鰯	4.1		8.3	87.6	29.4	38.4	14.3	24.3	42.8
メ粕	2.4				1.6	22.4		3.8	6.7
鯡粕	58.2	62.8	40.7	10.2	61.3	32.2	80	35.7	30.1
羽鯡	18.9	23.1	3.5	2.1			0.5	9.3	0.2
数子・白子	11.2	12.1			5.1	1.5			12.5
種粕・玉粕	1								
糠									
その他	4.2	2	47.5	0.1	2.6	5.5	5.2	26.9	7.7
合計	100	100	100	100	100	100	100	100	100

出典・記述の範囲：表3に同じ。

一〇〇〇俵を買付けた報告が行われており、この頃まで行われたようであるが、明治九年以降は記録が途絶えている。干鰯は明治二年（一八六九）まで低調だったが、明治三年（一八七〇）からは一定の割合を占めるようになり、明治一三年（一八八〇）、明治一七年（一八八四）、明治一八年（一八八五）には、二〇パーセント以上になった。とくに明治一七年（一八八四）には四二・八パーセントと鰯メ粕と合わせるると半分に近い販売額となり、その大半が、関東物で占めた。鰯メ粕も干鰯とほぼ同様な動きを示しており、関東物を中心に、明治五、六年のような宇和粕の大量な取り引きはなかった。鯡粕は、干鰯・鰯メ粕に並ぶ重要品目であるが、干鰯の販売が多い年は、少ない売買となり、鯡粕の多いときは、干鰯が少なくなるという傾向がある。羽鯡と数子・白子は、それほど比重は占めず、販売のない年もあった。以下、品目の内容について検討しておくことにする。

干鰯については、基本的に関東の干鰯が中心であるが、明治一一年（一八七八）はすべて能登引干鰯で、翌一二年も能登引き干鰯が一〇四四俵（重量四三〇九貫余）と八六俵で販売干鰯重量のほぼ三分の一を占めた。能登引きは、この二年だけである。ほかに明治一三年（一八八〇）には対州引き（対馬）が二五俵売られている。場所のわかるものでは、本場、鹿島、西方、日在、九十などで、九十（九十九里浜）は明治一七年（一八八四）

に四五〇俵（重量三八九八貫余）を地方の干鯛屋西谷嘉助に売った程度であった。鯛メ粕については、もともと販売数がわずかで評価しにくいのが、関東物の販売がなかった。明治九年（一八七六）と明治一四年（一八八一）は地廻り粕、同一三年は佐伯粕、同一七年は八戸鯛粕、同一八年は宇和粕が中心だった。

鯖粕は、明治一〇年（一八七七）、同一三年、同一六年が飛び抜けて多かった。この頃、鯖粕には産地の記載がない場合が一般であったが、明治一〇年（一八七七）については記載がある。これではネモロ（根室）、茅部、小樽内、利尻などが産地としてあがっている。羽鯖は明治九、一〇年に一定の比重を占めたが、地方の販売であった。明治一二年（一八七八）には市岡新田など村方でも直接購入しているが、その後、明治一七年（一八八七）ではやはり地方と紀州の肥料商にまとめて販売している。数子・白子はわずかな量が時々販売されるだけで、種粕・玉粕、糠はほとんど販売がなかったのでふれる必要はないであろう。最後に、その他が重要な比重を占める年がある。明治一一年（一八七八）は米一〇八八俵の販売があったためですでにふれた。明治一七年（一八八七）は、八戸粕、新粕、マシケなど記載が不明瞭なもののほか、笹目（鯖のエラ）など鯖粕・羽鯖の項目に入らないものが大量に販売されたためである。

まとめ

以上、幕末・明治初年から明治一八年（一八八五）まで、近江屋市兵衛の肥料販売について検討してきた。近江屋は、慶応三年（一八六七）の銀二五〇万八千貫余の売り上げ額から、ほぼ順調に売り上げ額をのぼし、明治六年（一八七三）には銀四七〇万九千貫余となった。その後、明治九年（一八七六）から明治一八年（一八八五）までは、一年間を示す完全な帳面がないため状況の把握が困難であるが、残された売日記で見える限り、やや後退したように見られる。ただ

委託取り引きの一部が他の帳面に記載されて残っていない可能性もあるので、評価は慎重にしなければならぬであろう。

近江屋の販売先は、永代浜(靱)の干鰯屋仲間が中心で、これに和泉・紀伊などの肥料商へ販売が加わっていた。松前問屋、荷受け問屋などから仕入れて、干鰯屋や他地方の肥料商へ販売したり、東京の干鰯問屋などの委託荷物を販売する問屋営業が基本であった。これと並行して摂津西成・東成を中心に他の摂津、河内の農村の直接消費者農民や在郷肥料商に販売することも行われていた。慶応・明治初年の特徴としては、安政四年(一八五七)の再興期に近江屋から大量に買付けを行った和泉の諸湊の肥料商の取り引きが一旦低調になった後、再び増加したが、前回の買付けの肥料商とは連続していなかった。また天保期に取り引きのあった紀伊の肥料商の買付けが再開されたことが大きい点である。近江屋の取り引きは拡大しており、大和葛下・葛上郡や広島、尾張、三河などの肥料商に販売が行われた。また明治九年(一八七六)より明治一八年(一八八五)では山城伏見の肥料商への販売も見られた。東京では、喜多村富之助と奥(和泉屋)三郎兵衛への糠や身欠き鯡の販売が行われた。しかし明治九年以降は、東京への販売はなくなり、紀伊との取り引きも低調になった。

販売品目については、鯡粕が重要な比重を占めるものの、買付けで見られるほど決定的ではなかった。干鰯や干鰯粕が販売の中心となる年も多く、明治九年以降もこの傾向は変わらなかった。大阪市場で幕末以降、鯡粕が他を圧倒していくということではなく、その時々¹⁹の価格、入荷事情などが影響したようである。また干鰯はこの時期は、関東物で他の地域に見られた干鰯からメ粕への転換とか、鯡粕への移行ということが明確には起きていない¹⁹。その背景には、大阪周辺の農村の干鰯にたいする選考の強さがあるのかも知れない。なお関東干鰯については、委託販売が明治一七年(一八八四)でも行われており、それが買日記には出てこないため、売日記を分析した傾向とは乖離する原因になって

いる。また明治初年から、種粕・玉粕、糠の取り引きも開始したが、明治一〇年以降、なくなった。

以上、近江屋の明治初年から明治一八年（一八八五）までの販売動向について述べたが、近江屋市兵衛は明治一〇年（一八七七）に、同じ肥料商だった金沢仁兵衛とともに、第四十二銀行を創立して、その頭取となり、以後、大阪で財界活動を活発化していった。明治後半になると、その経済基盤は企業経営者としての収入となったといわれる。¹⁹したがって肥料商売を拡大していくという方向は採らなかつたようで、その影響が明治九年以降の帳簿に出ているとも考えられる。

注

- (1) 拙稿「大坂干鰯屋近江屋市兵衛の経営」(三)〔東洋大学文学部紀要〕六九集史学科篇四一号、二〇一六年。
- (2) 同前。
- (3) 同前。以下、買付けについては、同論文参照。
- (4) 近世では、大坂干鰯屋仲間は永代浜(靱の島)とその周辺に店を持つことを参加要件としていたことからこの区別が発生したと見られる。
- (5) 『大阪肥物商組合一斑』二の上、(大阪市史編纂所所管)。
- (6) 明治六年正月「干鰯売日記」(東洋大学井上円了記念博物館蔵、近江屋市兵衛家文書) 五三番、以下、近江屋市兵衛家文書何番と称する。
- (7) 明治五年正月「干鰯買日記」(近江屋市兵衛家文書) 五〇番。
- (8) 原直史「松前問屋」(吉田伸之編『商いの場と社会』シリーズ近世の身分的周縁4、吉川弘文館、二〇〇〇年) 表三。
- (9) 齊藤善之『内海船と幕藩制市場の解体』(柏書房、一九九四年) 四一〜四六頁。なお同書二四四〜二四五頁では同家は嘉永四年に内海の戎講加入船が四艘で、天保期の一〇艘より、船数を減じていたが、明治四年の船数帳でも筆頭船主の地位を維持していたとされる。ここでも持ち船が確認できる。
- (10) 梶屋久右衛門については拙稿「幕末維新期における畿内先進地域の肥料商」(一)(二)『東洋大学文学部紀要』六二、六三集、史学科篇三四、三五号、二〇〇九、二〇一〇年) 参照。
- (11) 拙稿「大坂干鰯屋近江屋市兵衛の経営」(二)〔東洋大学文学部紀要〕六八集、史学科篇四〇号、二〇一五年)。
- (12) 拙稿「大坂干鰯屋近江屋市兵衛の経営」(一)〔東洋大学文学

部紀要」六七集、史学科篇三九号、二〇一四年)

- (13) 拙稿「大坂干鰯屋近江屋市兵衛の経営」(三)(前掲)。奥三郎兵衛が和泉屋を称していたことは、原直史『日本近世の地域と流通』(山川出版社、一九九六年)二一三頁。

- (14) 明治六年正月「干鰯売日記」(前掲) 五三番。

- (15) 拙稿「大坂干鰯屋近江屋市兵衛の経営」(一)(前掲)。

- (16) 拙稿「大坂干鰯屋近江屋市兵衛の経営」(三)(前掲)。

- (17) 同前。

- (18) 同前。

- (19) 例えば、阿波の大藍師三木屋の肥料商売では、文化から文政期に干鰯から鰯メ粕への転換が、文久期には鯖粕への変化が認められる(拙稿「阿波藍商と肥料市場」一、『東洋大学文学部紀要』六四集、史学科篇三六号、二〇一一年)。また下野都賀郡西水代村の田村家では文化期には干鰯も販売していたが、天保期には鰯メ粕が中心になっていた(拙稿「近世後期主穀生産地域の肥料商と流通」『東洋大学「東洋学研究」四七号、二〇一〇年)。

- (20) 井奥成彦・中西聡編『醤油醸造業と地域の工業化』(慶応義塾大学出版会、二〇一六年)五五六頁。ここでは田中市兵衛は多くの企業を立ち上げて、その経営者として、配当所得だけでなく、会社役員報酬が収入を多くを占める商業資産家が企業家的資産家となった事例としている。

付記

本論文は二〇一四～二〇一六年文部科学省科学研究費補助「近世の肥料商と農業経営」(課題番号)二三五二〇八三二)の研究成果の一部である。論文作成にあたって、東洋大学井上田了記念博物館、大阪大学経済学部経営学部経済史経営史資料室、大阪市史編纂所、国文学研究資料館など関係機関の皆様のご協力をえた。記して深謝の意を表す次第です。